

「幼」と「小」をなめらかにつなぐ ～宮教大幼小連携推進研究室の取り組み～

授業中座ってられない、先生の話聞かない、学校環境になじめない。
このような行動がおよそ10年前から小学校1年生に目立ち始めました。「小1プロブレム」と呼ばれる問題です。
宮城教育大学では保育所・幼稚園・小学校と大学が連携して、「小1プロブレム」をはじめとする幼児教育と小学校教育との接続をめぐる問題を研究・克服するための研究室を開設しました。
小1プロブレムとは？ 幼小連携とは？
本誌10月号にご登場いただいた幼児教育の専門家・佐藤哲也先生に今回も詳しいお話を伺いました。



教育学部幼児教育講座 准教授
佐藤 哲也 先生

今年3月から兵庫教育大学から宮城教育大学に移り教鞭を執る。兵教大在職時には、大阪市、神戸市、宝塚市、三田市、豊岡市等の委員会や審議会のメンバーとして、幼児教育・保育をめぐる今日的課題について取り組んできた。専門領域は幼児教育学、アメリカ教育思想史。保育現場に寄与する実践理論の開発、プロテスタンティズムの宗教思想から人間形成を考察する研究などを進めている。2児の父。

幼稚園と小学校を連携する

今年度に入り、宮城教育大学（以下・宮教大）では、高橋孝助学長の発案により、「宮城教育大学幼小連携推進研究室」を立ち上げました。
この研究室は、幼稚園と小学校の教育実践・研究における連携の確立を目的に、活動をはじめました。震災の影響もあり、実質的には6月頃から本格的な運用を開始しました。
この研究室では、まず第一に、「情報収集」に力を入れています。幼小連携に関する研究論文や書籍、都道府県市町村が制作したパンフレット等を集め、調査する作業です。
二つ目は、保育所、幼稚園、小学校を巻き込んでさまざまな連携事業を推進するために教育委員会等と連携していきます。例えば、今年9月に発足した「角田市幼児教育懇談会」には本研究室兼務教員が参加し、角田市の保育所、幼稚園、小学校、児童館などの先生方と幼児期から児童期にかけての地域ぐるみの子育て支援について、意見交換をしています。
三つ目は、保育・教育現場の研修や研究、子育て支援活動に宮教大のスタッフを派遣する活動です。多くの宮教大教員が保育所や幼稚園に出掛けています。教員研修のお手伝いをしたり、保護者対象の子育ての講演会を実施するなど、実践現場と深く関わっています。しかし、それらが目に見える形で表れていないのが現状です。
そこで、この研究室が幼小連携の統括的役割を担いながら、大学と保育・教育現場をつなぎ、教育の専門大学としての地域貢献をアピールしていきたいと考えています。



きっかけは「小1プロブレム」

この研究室が設立された背景には「小1プロブレム」があります。みなさんは「小1プロブレム」をご存知ですか？
これは小学校1年生が「学校不適応」を起こす問題です。「尾木ママ」でおなじみの尾木直樹先生も、この問題にいち早く注目した一人です。
かつては「ピッカピカの1年生」と言われるほど、1年生は張り切って通学したものです。しかし10年ほど前から「席に座ってられない」「先生の話聞けない」といった児童が増え始めたのです。そのため授業が成立しない、学級が成立しないという事態に陥り、全国各地で大きな問題になりました。
これが小学校1年生の問題「小1プロブレム」です。
小1プロブレムの原因は何なのか。問題が起こり始めた頃、小学校教諭は幼稚園や保育所における「自由遊び」を非難しました。平成元年、幼稚園教育要領が約25年ぶりに改定され、「自由遊び」が尊重されるようになりました。幼稚園や保育所では幼児による好きな遊びが積極的に推奨され、子どもの自主性や主体性、創造性の育みに重点がおかれ、自由に遊んでいた子どもたちが小学校に進学した途端、「あなたの席はここです。ここで40分間、先生のお話を聞きなさい」と言われても無理なのではないかと、小学校の先生方は考えたようです。「幼稚園で自由に遊ばせているから、小学校入学後に統制が効かなくなった」と言うのです。
ところが幼稚園や保育所の先生方は、自主性、主体性、友だちとのつながりを大切に育ててきたのに、小学校にあがったらいきなり「黙って勉強しなさい」「先生の言うことを聞きなさい」では、子どもがついて行けないと反論しました。おまけに幼稚園では「お兄さん」「お姉さん」として立派に生活してきた年長5歳児が、小学校入学の途端、最下級生として「赤ちゃん扱いされる」とも言われました。
しかし保育所・幼稚園と小学校の先生同士が非難し合うのではなく、歩み寄って語り合ったり、合同で研究会を開いたりしながら、問題の核心に迫る必要が出てきました。互いに協力しながら子どもたちが楽しい毎日を送るためにはどうしたらよいのか考えるようになったのです。これが幼小連携です。
私は関西から仙台に来ましたが、関西では「小1プロブレム」はすでに「死語」になっている感がありました。その理由の一つは、公立幼稚園が核となって公立小学校と密接に交流・連携し、私立幼稚園や保育所を巻き込む実践と研究環境を整えていたからです。
しかし仙台市はどうか。仙台市は私立幼稚園が圧倒的に多いですね。
たとえば、小学1年生のクラスに30人の子どもたちがいた



とします。「みなさんどこの幼稚園から来ましたか？」と聞けば、10園前後の幼稚園や保育所名があがるかもしれません。それだけ数が多ければ、子どもたちの出身園がどんな保育をしているか、小学校に入学してくるまで子どもたちがどんな生活を送ってきたのか、小学校の先生方は把握できません。チャンネルが多すぎて連携が不可能なもうなずけます。
幼稚園は義務教育ではありません。ですから子どもたちの中には幼稚園・保育所に行っていない、小学校が初めての集団生活という子がいるかもしれません。このような理由から、小学校に入学したら就学前の経験を一度リセットして「一からやり直す」という発想が出てくるのだと思います。ここが仙台における幼小連携の難しさです。私はまず、仙台市や宮城県の教育現場の実情を早く把握したいと考えています。

幼小連携の研究と実践の推進

教育学者、心理学者、教育の内容の研究者など、宮教大にはさまざまな専門家がいます。これらのプロフェッショナルが幼小連携に関わる教育現場の要請に応えて、教員養成・教育研究の専門大学として地域とパートナーシップを今まで以上に密にしていこうと期待しています。
私自身はというと、幼児保育・教育の「スタンダードカリキュラム」の必要性を感じています（仙台市には義務教育である小学校を基点とした「スタートカリキュラム」がありますが）。公立、私立、幼稚園、保育所、認定こども園、どのような就学前保育施設に通園しても、幼児の経験や学び、育ちの「この部分は共通して保障していく」といった指針が時代の要請となっています。私立幼稚園が多い仙台市でも、何らかの指針のもとに保育が展開することで、幼稚園、保育所から小学校への連携もなめらかになると思うのです。「スタンダードカリキュラム」のような指針があれば保護者の方も安心できるはずですし、小学校の先生方も幼児教育に対して理解と関心をもってくださるでしょう。
しかし、何よりも一番大切なのは子どもたちです。
子どもたちがスムーズに小学校に進学して楽しく学ぶ。子どもの生活と学びを保障できるように、先生方にも問題意識や力量を身につけていただく。子どもたちの健全な学びと育ちのために、みんなで力を尽くすことが大切です。宮城教育大学幼小連携推進研究室がその一助となっていければと願っています。